



日本ピアノ教育連盟

30周年記念シリーズ vol.4

この連載は、30年の足跡を辿り連盟の未来を考えるシリーズです。

教育連盟では、第11回、第12回のオーディション、全国研究大会でフランス音楽を取り上げました。当時の連盟会長であり、フランスピアノ音楽の第一人者であった安川加壽子先生への特別インタビュー、研究大会での講演の記録が残されています。

1997年に設立された安川加壽子記念コンクールは、今年第8回を迎えます。

開催にあたり1994年、1995年の特別インタビュー、1995年第11回、1996年第12回全国研究大会講演から抜粋、編集してお届け致します。

特別インタビュー

安川加壽子先生 フランス音楽を語る

～ その1：1994年 夏号 38号より ～

きき手・構成 三富二葉（広報部副部長 1994年当時）

フォーレがいなければドビュッシーもラヴェルも出なかった

—— 先生の演奏によって私達は初めてフランスピアノ音楽への目が開かれたわけで先生のご功績は本当に計り知れないものと思っております。

私がパリで学んだのは1930年代ですが、私の師事したラザール＝レヴィ先生はフォーレやドビュッシー、ラヴェル、それからルーセル、オネガーなど、その頃新しい音楽とされていたものをどんどん弾かせました。一方先生はシューマン、ブラームスがお好きで素晴らしい演奏をなさりその勉強はいつもさせられました。

—— フランスものの初演は殆ど先生がされていらっしゃる。

そうですね。例えば「クーブランの墓」も抜粋では皆さん演奏されていましたが組曲としては初演でした。

—— 先生のようにフランスでお育ちになり文化、風土を自然に自分のものとされている方から見てフランス音楽と日本人の感覚をどうお考えでしょうか？

私は実際のところ自分ではどこがどう違っているのか解りません。ただ小さい頃からフランス音楽と密接な関係がある印象派の絵をいつも見ていましたし、文学、特に詩の世界に親しんでいたことは確かです。1889年パリで万国博覧会が開かれて、初めて日本の版画や金蒔絵の漆の文箱が紹介されました。ドビュッシーもラヴェルもそれをいつも大事に身近に置いていました。日本的な感覚が解っていたと思われそうですし音楽的にも影響しています。

—— 初めてのフランス音楽のテーマにまずフォーレを取り上げられた意味は？

フォーレの一番の功績は新しい和音の連結です。それは全く新しい考えでした。フォーレがいなければドビュッシーもラヴェルも出なかったと思います。フォーレを取り上げなければ後が続きません。

—— ドビュッシーはフォーレの10数年後に生まれ先に亡くなっています。大変長生きだったフォーレを知ることはフランス音楽の流れを追って行くことにもなります。

彼の一番の傑作は歌曲ですね。あるいは室内楽、レクイエムも素晴らしいですが。

—— フォーレとドビュッシーの音楽の一番の違いは？

ドビュッシーの場合はオペラ「ペレアスとメリザンド」のように歌と言ってもただ話をしているような部分もありますし、通常の歌の概念を越えています。ドビュッシーが求めているのは色彩です。音を一つ出すのでもモネの睡蓮の絵の世界のように、光り、輝き、それから水の反映など、色のある音が求められています。

—— とおっしゃいますと？

いろいろなタッチが必要です。要は自分の耳でよく聴き、どんな音が求められているのか、和声全体の複雑な響きを聴きわけることです。それと微妙なペダルの扱いです。浅く踏んだり深く踏んだり、ペダルが本当に重要な役目を果たしています。低音の長い和音を保っていなければならない場合、和音を重視するか旋律を重視するかペダルの判断も難しいところですよ。

—— 音に対してイメージを持つことが重要なことは解りますが、どうしたらその音を心に描けるようになるのでしょうか？

シンフォニーを聴くことですね、ドビュッシーの音の響きの世界を知るには彼のシンフォニー、「海」や「牧神の午後」などを聴くのが一番よいでしょう。フォーレの場合は歌曲です。歌曲を沢山聴くことです。

クラヴサン音楽はフランス音楽の源

—— 小さい人たちにはヴェルサイユ楽派から課題が出ていますが？

手がまだ小さい人たちにはフォーレ、ドビュッシーは無理です。ペダルも必要ですし、リュリ、クーブラン、ダカン、ラモーなどチェンバロ音楽がよい勉強の材料になると思います。

—— 素晴らしいフランスのバロックですがバッハ、ヘンデルが余りにも偉大なのでその陰に隠れてしまっています。

フランス音楽の源です。ここからドイツの方へ行きバッハ、ヘンデルに移りました。それからイタリアに行き…クラシックはまたドイツに戻り…音楽は回り回っています。ドビュッシーはラモーを尊敬し、ラヴェルはクーブランを尊敬していました。フランス音楽は大きな目で見ると音楽の流れの鎖の一部分です。これが一つ抜けても音楽は繋がって行きません。

～ その2：1995年夏号42号より ～

きき手・構成 梅本俊和（広報部長 1995年当時）

基礎の重要さ

—— 安川先生は子供の頃モルパン先生（後にエコール・ノルマル学長）に基礎を習ったとお聞きしましたが、その基礎について詳しくお聞きしたいのですが。

とても音楽的でオーソドックスな教え方でした。月に2度位はクラスの全員（15名）がスケール、アルペジオを全調で、しかも3度6度10度等をその場で指示された通り弾くのです。初めにそれを系統的にやっておけばあとはその応用ですから、徹底的に弾かされました。私は今でもそれをレガートやスタカート等、弾き方を変えながらやる事が大変重要だと考えています。

—— 先生はその頃、10歳位と思いますが、退屈だったり、嫌気がさす事はありませんでしたか。

クラス全員が競争みたいにしてましたから、結構面白半分みたいに右へ倣え式に…。それにもう1つの柱はバッハでした。2・3声から始めて、色々な組曲をしてから平均律に入りました。

—— 子供達はどうもバッハを嫌がる傾向があるのですが。

私はしつこくバッハを勉強してくる様に要求してますけど…音楽的基礎の原点だと思います。

—— 私は先生のお名前を初めて見たのがメトードローズだったと思います。その頃バイエル一辺倒の中で鮮烈な登場でした。

昭和25年頃だったでしょう。とにかく野村先生（野村光一氏）が「あなたの子供の頃習ったメソッドを是非紹介しなさい。」と勧めて下さったのがきっかけでした。（フランスでは）私の年代の人達、ピアノ以外の人達も皆んな弾いていた様です。

ドビュッシーとラヴェルの音色の違いは？

—— 第12回研究大会では、新しくラヴェルを取り上げる事になりましたが、ドビュッシーとラヴェルの違い等お聞きしたいと思います。

先ず両者の弾き方が違うのですね。ドビュッシーは音色を考えたり想像力を豊かにして印象派的な色彩が中心ですが、ラヴェルはむしろ水晶の様な澄んだ音、透明度のある音色が必要です。奏法としては指先の使い方の相違になります。簡単に云えばドビュッシーは指を平らにして指のお腹で柔らかい音色を出す事が多いのに対してラヴェルはもっぱら指先でシャープな音を得なければなりません。又ラヴェルのピアノ曲は自身でほとんどオーケストレーションしていますから、根底にはいつも楽器の音を想像されたらいいでしょう。あるいは彼自身、楽器としてピアノだけではもの足りなかったのかも。

—— 二人は年齢的に約13年位離れています。先生はモネの“睡蓮”が大好きとおっしゃっていましたが、あの世界はドビュッシーですね。

やっぱりドビュッシーですね。じゃあラヴェルは何だろう！？…ピカソまではいかないけれどそれに近い様な感じです。

子供のときに沢山の名曲を聴かせることが大切

—— 最後に日本の子供達のピアノ教育に対してお考えの事を。

もっと楽しく学べる日本の作曲家による作品があればと思います。又そう云う作品がどんどん生み出せる様に連盟もその一翼を担う事ができれば素晴らしいと思います。それから名曲の数々を一杯聴かせてあげる事です。ピアノだけでなくオーケストラやオペラのさわりのところを聴き、小さい時から耳を肥やしておけば歌い方も変わってくるでしょう。本当にピアノは歌う事の難しい楽器です。元々持っている子は歌えますが、そうでなかったらどうしていいかわからないでしょうね。だから他の楽器でその様な体験をさせたり、聴かせたりするのが一つの手じゃないでしょうか。

—— 先生方はなかなか時間が無いのでは…。

いや、それは家庭での事なんです。私も父が音楽が大好きで、アメリカからレコードをたくさん持って帰って来ました。ほとんど歌のレコードでしたが子供の頃、よく聴いたものです。

—— それが歌うと云う事につながったわけですね。

全国研究大会

フランス音楽とわたし

～ 1995年 第11回全国研究大会より ～

きき手：山岡優子（フェリス女学院大教授）

パデレフスキーとの出会い

—— 安川先生は生後14ヶ月からフランスでお育ちになられました。先生のお過ごしになっていた頃のフランスはとても良い時代でございましたでしょうか？

そうですね。まだ私は子供だったからよく解らなかったけれど、ロシアバレエがパリに乗り込んだり、詩人のジャン・コクトーが中心になって6人組が出来たり本当に面白い良い時代だったと思います。

—— 作曲家でもありピアニストでもあったポーランド大統領のパデレフスキーの演奏もお聴きになったとか…。

私が8歳の時だったと思います。両親に連れられてパデレフスキーを聴きに行きましたがその時の印象があまりに強いので今でもはっきり覚えています。フロックコートのような服を着てらして四角い房のあるピアノの椅子。椅子も珍しかったし、髪が真っ白でふさふさしていてそこからして何か圧倒されるような感じでしたね。時間になるとさっさとステージに出てらして…。昔皆がやっていたように即興演奏が始まり慌ててお客様が席に着いて静まったところでプログラムが始まる。

— どんなものをお弾きになったのでしょうか？

確かショパンのプログラムでした。ポロネーズだけはよく覚えています。翌日シャンゼリゼ劇場の前にパデレフスキー夫妻が現れて、母が「昨日の演奏会は素晴らしかった」と声をかけたの。とても喜んで握手して下さって、私、それは一つの大事な思い出になっています。

音楽は生きている

— 音楽教育は全てパリ国立高等音楽院で？

そうですね。小学校を卒業した年齢でコンセルヴァトワールに入れるんです。器楽のクラスでもソルフェージュが必修でした。ピアノはモルパン先生。基本をしっかりと教えて戴きました。週3回クラスがあって1日はバッハと曲目、もう1日はスケールやアルペジオ、それと初見でしたね。

— 初見は大事でございますね。パリの初見は曲の把握に一番重点を置いているとか？

そうですね。20秒位楽譜を見たら、もう始めなくちゃいけない。テンポは下さるけれど一目見てリズムカルな曲か歌う曲かどんなジャンルの曲か、大まかなことがすぐ解るようにじゃないといけないのです。

— この「曲想を掴んで弾く」と言うことは、良い演奏が一番楽に出来る最も自然な方法なのですね。

当時予備科というクラスがあって私は10歳で予備科に入り12歳で本科に入りました。

— そして15歳の時に1等賞でご卒業されたのでございますね。日本に帰られたのは17歳。

そう、避難船で。大東亜戦争が始まって日本の家族は皆引き揚げるようになった時、たまたまジュネーブに避暑に行っていて国境が全部閉まってしまったの。何とかイタリーのナポリに出て、それから後は船で日本に着くまで75日もかかっちゃったの。

— お若い時から現在に至るまで先生の音楽観がお変わりになられたことはございませんか？

音楽観て音楽の感じ方？考え方？……それは変わらなければ進歩しないわよ。

— では、それはどのように？

年と共に楽譜の読み方が違ってきて、深く解るようになってきました。本当に音楽は生きている、息を楽にして弾く方法を考えなきゃいけない、と思いますね。

— その“こつ”を何か教えていただけますでしょうか？

ピアノだけ考えていては駄目ね、歌だったらこういう風に息をつぐ、弦のボーイングだったらこういう動きがあるとかを感じないと。ピアノも同じ様に息をとりながら次に行かなくちゃいけないのに息もつかずにどんどん進んでしまう。ある程度余裕を持って自分の音を聴かないといけません。結局は耳の問題と言う事になりますね。

— 若いうちから歌とか他の楽器と合わせものをするのも大切ですね。

そう、作曲家もピアノだけ考えて作曲している訳ではないでしょう？無意識的にでも他の楽器やオーケストラの音を連想しながら書いている、それが解らないと演奏も面白くなくなるしそれこそ色合いも失くってしまうのね。

～ 1996年 第12回全国研究大会より ～

きき手：山岡優子（フェリス女学院大教授）

ソルフェージュは音楽の基礎

- こういう質問をさせて頂くのはよくないかもしれませんが、お伺いしたいのは、先生はお小さい時から本当にピアノがお好きでしたでしょうか？（笑）
- それは好きだった筈なんだけど。練習はやっぱ好きじゃなくて。予備科の試験が始まる一ヶ月前からやっと本気になったんです。
- 本気になれる前と後では練習は？
- まだ9歳、10歳位だから45分、それで15分お休み、それで又45分。それを3回…。
- それはその年齢に集中力が持続出来る範囲ということでしょうね。
- そうです。でもその後は休みなしにして、3時間続けて。レヴィ先生も「集中して1時間しっかりやりその集中力を3時間続ければその位でよい。」とおっしゃった。
- バリのコンセルヴァトワールで先生はお勉強あそばした訳ですが、ピアノ科の生徒が他に必ず受けなければならない授業は？
- ソルフェージュと室内楽。ソルフェージュは予備科に入ったとき必修でね。10歳位の子供と管楽器だとか大人のおじさんみたいな人が一緒のクラス。
- 室内楽はクワルテットやトリオとか先生が楽譜を与えて下さって初見でやるわけ。
- フランスではまず最初に音楽の勉強にはソルフェージュが必要だと…。
- それは基礎だから。ソルフェージュは聴音、初見で旋律を歌う。指定された記号で、歌わずに音名だけで出来るだけ早くそれを読む。勿論楽典も。あちらでは必ずタクトをとって歌う。
- 自分が弾く曲もタクトを振りながら旋律、リズムにしてもやってみますと身体の血液が全身でそれを理解し覚えるので、すぐピアノで弾くと見違えるようになりますね。
- 先生は終戦後、すぐに来日下さいましたラザール・レヴィ先生のクラスでお勉強なさいました。お人柄とかレッスンのご様子、お話頂けますか？

恩師レヴィ先生

レヴィ先生は15歳位で一等賞で卒業なさり、すぐ国際的な演奏活動をお始めになったんですが、20歳過ぎて突如テクニックの壁にぶつかられて20年間エラールの建物にこもってご自分のテクニックを洗い直された。結局いかにして楽な姿勢、方法でよい効果が出るかという事。よくレッスンでも「私は20年間研究したものを2、3分で教えるんだからちゃんと聞いていなさい。」って。どの指がどんな音を出すか完全にわかっていて広い部屋の向こうにいても「ここの指使いは違う。」といわれる。先生の指使いは合理的で次に移る工夫が出来ている。指だけでなく腕や手首をいかに上手に使うかという事も教えて頂いたのね。

—— いわゆる自然奏法というか、どの曲にも適材適所にあてはまるテクニック、大事ですね。それから加壽子先生のエレガントなステージを皆様よくご記憶と存じますが、秘訣は何でございましょう？

初めてのパリでの演奏会、レヴィ先生が聴きに来て下さって、終わったら先生の顔が見えるかと気にしてお辞儀半分で引っ込んだ。ちょうどハリウッドで活躍してらした早川雪洲さんがパリにいらして一晩教えて下さった。「聴衆は上から下までいらっしやる。だから目は上から下まで見なくちゃならない。」と。結局ステージに一步踏み出すと演奏会はもう始まっていて引っ込むまでは続けている。それをいつも言われました。

—— ではもう2つ伺わせて下さい。よい感性を持っていないのにピアノが勉強したい、そういう人にはどうすればよいか。それからコンクール今沢山ございますが、先生はどの様なお考えで？

最初はよい音楽を聴く事が必要でしょうね。音楽だけでなくその時代の絵や文学、皆一緒に動いているから。そういう事を心がけて。コンクールは目的でなく過程ですから、その為だけの勉強で終わる事はあまり賛成しないですね。良い面もあるけれどそればかりに気を取られず、後々長く音楽を勉強、あるいは好きになれるような工夫が大切。

—— 後から顧みてコンクールを受けた事が自分の栄養になっている事。落ちても落胆せず、入っても天狗にならず、精神的な支えでしょうか。本当に貴重なお話有難うございました。

(編 広報部 吉田たまき)